国立大学法人
大阪教育大学

附属平野小学校　野網　学
多文化教育系　田中　俊弥

図画工作科美術鑑賞における国語科との教育的アプローチの比較研究（令和６年度）

言うまでもなく、図画工作科と国語科は異なる教科であり、目標や授業の方法、評価などの教育的アプローチは異なる。しかしながら、自らの実践研究（「教科横断的指導による『深い学び』の実現～『鳥獣戯画』を通した言語能力の育成～」教育研究集録第27集，p64-p67，2021年，日本教育公務員弘済会大阪支部）において、教育的アプローチの重なる部分も多いと感じた（下部掲載）。

対象作品を同じ《鳥獣戯画》とした、図画工作科美術鑑賞《鳥獣戯画》と小学校国語科「『鳥獣戯画』を読む」（6年生，光村図書）の教科書や指導書、全国の指導案、実践例を分析し、比較することにより、図画工作科鑑賞領域の独自性を浮かび上がらせる。また、対象作品を同じ《最後の晩餐》とした、中学校美術科と中学校国語科「君は『最後の晩餐』を知っているか」（中学2年，光村図書）も比較し、知見を得る。

はじめに

「小学校図画工作科における鑑賞学習指導についての全国調査報告」（日本美術教育学会研究チーム）では、図画工作科指導の積極性は、「積極的である」「ある程度積極的である」を合わせて92.6%であったのに対して、鑑賞学習指導の積極性において「積極的である」「ある程度積極的である」との回答割合は、43.2%であった。その原因として挙がったのが、「表現（制作）に取り組ませることで目一杯である」に次いで、「提示する資料が乏しい」（計75.8%）、「評価基準の設定に困難を感じる」（計75.6%）、「教材研究をする時間がとれない」「実際に評定をつけることに困難を感じる」（計74.4%）と、いずれも7割を超えている。

図画工作科において、表現領域に対して鑑賞領域では、教員の指導の積極性が低いことが明らかとなった。その要因として、題材への不安や評価の曖昧さがあると考えられる。

期待される成果

本研究により浮かび上がった図画工作科美術鑑賞の教育的アプローチを提案し、学会発表、論文投稿をすることで全国の研究者・実践者に拡げる。また、研究者・実践者からフィードバックを得ることにより、今後の図画工作科美術鑑賞の研究に生かし小学校教師の美術鑑賞学習の積極性向上に寄与する。

教科横断的指導による「深い学び」の実現

―『鳥獣戯画』を通した言語能力の育成―

大阪市立姫島小学校
主務教諭　野網　学

1. 背景と目的

平成29年3月告示の小学校学習指導要領総則では、変化の激しい新しい社会で活躍できる人材の育成が求められており、その手立てとして教科等横断的な視点が掲げられている。また、児童の発達の段階を考慮し、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の基盤となる資質・能力の育成が求められている。それらの資質・能力を育成するためには、「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善が必要である。特に重要となる「深い学び」については、児童の中で知識と知識が結び付き、つながることで初めて得られる学びと考えられる。これは、既得の知識と新たに獲得した知識とを関連付けたり、組み合わせたりしていく学びとも言える。すなわち、知識と知識がつながる「深い学び」を実現するためには、授業改善はもちろんのこと、同じ教科内だけでなく異なる教科ともつながるように、教科横断的な指導を充実させる必要がある。

本研究では、教科横断的指導において図画工作科と国語科を教科横断して『鳥獣戯画』を学習する。具体的には、すべての教科の基盤となる語句・語彙に着目し、図画工作科で培われた美術固有の語句・語彙がいかに国語科に活用・発揮されているのか言語能力の分析、考察を行う。この実践結果により、教科等横断的な指導に関する成果と課題を明らかにする。

2. 実践の概要

2019年6月19日（水）から7月5日（金）までに、大阪市立姫島小学校の6年生3クラス中の1クラス27名を対象に授業を行った。図画工作科を3時間実施した後、国語科を9時間実施した。

単元の導入では，前年度の図画工作科の鑑賞学習で取り入れた「対話による鑑賞」と同じように、初めて見る『鳥獣戯画』の絵に対する互いの意見を交流することで、絵の見方の違いやその面白さを味わわせる。その後、国語科において教材文『鳥獣戯画を読む』を範読し、これまで図画工作科の学習で自分の見たことや感じたことを交流したりしていたことが、文章により表現されていることに気づかせたい。今まで鑑賞を重ねてきた経験が児童の興味をひき、活動の意欲につながることと考える。

3. 教科横断的指導による授業実践

◆図画工作科の鑑賞授業『鳥獣戯画』

筆者は昨年度、高学年の図画工作科鑑賞領域において授業展開の方法論を確立した。具体的には、「形」「色」「配置・構成」の観点からじっくり作品をみて、作品の「見方・感じ方」を拡張し、浮かび上がってきた作品の「主題」に迫るという展開に鑑賞授業を定式化した。その結果、多様な「見方・感じ方」で作品を鑑賞することができた。

【定式化した授業展開】
①個人でじっくり絵をみて、「目に見えるもの」「形」「色」の視点をワークシートに記入する。
②グループ（4人）で共有する。
③学級全体で共有する。（対話による鑑賞）
④動詞（動類、台詞）を作ることで、絵の中に入る。
⑤対象の作品（同作者又は同テーマ）の作品と比較し、共通点と相違点を考えることで、絵の主題に迫る。
⑥グループで共有する。
⑦学級全体で共有する。（発表）
⑧振り返りをする。

本授業では、「造形的なよさや美しさ」をより感じ取ることができるように、鑑賞授業の展開をカスタマイズし、作品の制作の追体験を組み込んだ。

第一時では学級全体で「対話による鑑賞」を行い、友だちの意見を聞くことで自分の見方・感じ方を深めた。

【「対話による鑑賞」の前半の一部分】
C8：水墨画みたい。
C1：他の絵とか、一切。普通やったら、兎とかやったら、体がピンクとか、白とか使っていると思うけど、黒しかないから。

1

C2：うん。水墨画みたい、雰囲気。
C4：輪郭、黒いし。しかも蛙の柄みたいな黒で薄めているから。
T：濃淡で、水墨画ちゃうか、と。他の人、水墨画について。C7さん。
C7：あそこの葉っぱみたいなのの奥が、色を使わずに、墨を薄めて使っている。
T：これな。よく見ている。背景が、こんな感じやけど。これも、一つの枝ちゃうかなと、水墨画の。なるほど。C1さん。
C6：左の上の草みたいなのが、下手に濃すぎる、黒の。
T：ああ、これ。なんで濃すぎるように書いてあるの？
C5：近いから、よく見えるように。

「対話による鑑賞」の前半は、主に「色」について焦点が当てられた。作品の中には主に白と黒しかないが、児童はその黒の濃淡に注目しており、濃淡の意味も考え始めていた。１学期の図画工作科で社会科の歴史と関連付けながら雪舟の水墨画を墨で模写した経験も活きていた。

【「対話による鑑賞」の後半の一部分】
T：じゃあ、そもそも、なんで蛙と兎が、そんなプロレスしてるん？　なんで蛙と兎なんやろ？これ。じゃあ、プロレスで良い？　誰。
C4：うん！　分かった！　長篠の戦いで、蛙が武田勝頼で、兎が織田。
T：C4くん、それさ、これは、ほんまは、人やけど、人を動物に描いているんちゃうかと。
C4：そういうこと！
C9：付け足しというか、反対というか、なんというか。プロレスいうより、相撲じゃないかな。
T：なんで相撲と思ったん？
C1：なんで相撲で耳を噛んでいんですか？
C13：俺も思った！
C1：でも、なんか知らんけど、この兎、キレイに殴やってんで。
C11：C9さんに質問です。どうやったら。蛙は小っこくて、兎はでかいはずやけど、どうやって相撲するんですか？
T：ああ、大きさがそもそも、これ、おかしいやんってことやな。なんで、これ、じゃあ、大きさ一緒なんやろ？　こんな大きい蛙、たしかに。
C12：プロレスと相撲かで、なんか分からんけど。絵の場面に合わせたものを無理矢理。

後半は、兎と蛙がプロレスしているのか相撲をしているのかについての話し合いがあった後、「形」の観点から兎や蛙がどうして同じ大きさなのかや、「主題」の観点から擬人化しているのではないかなどの積極的な意見が出た。

第二時では『鳥獣戯画』を画仙紙の右半分に墨でトレースして、水墨画や絵巻のよさを実感した。また、画仙紙の左半分に半紙でトレースした『鳥獣戯画』を構成・配置を考えながら切り貼りして、自分で想像したストーリーの続きを創作する。その際の根拠を「対話による鑑賞」をした『鳥獣戯画』から探すように指導した。第三時では、友だちの創作した作品を「対話による鑑賞」し、作品に対する見方・感じ方を広げた。その後、改めて『鳥獣戯画』について新たに感じ取ったことや考えたことを記述した。その結果、『鳥獣戯画』から根拠を探り、自分たちで創作したストーリーから論理を逆にして『鳥獣戯画』に立ち返ることにより、新たな見方・感じ方を獲得した。

【画仙紙に『鳥獣戯画』の続きを墨で描いた児童の作品】

◆国語科の書く授業『鳥獣戯画を読む』

国語科の授業では，「読みの学習で学んだことを生かして，絵から読み取ったことや感じたことを，絵を見る人に伝わるように表現を工夫して書くこと」をねらいとした。自分のものの見方で絵を読む力と，読み取ったことを「評価を表す言葉」を用いて表す力を身につけさせたいと考えた。ここでは，絵のよさを伝えるために筆者が用いている「評価を表す言葉」を，「読み取ったことや感じたことを表す表現」として指導した。筆者の評価が表れている表現を見付けながら読むことが，自分の考えを書くときの表現の工夫として生かされていくと思われる。

書くことを意識した読み取りの段階では，「筆者は絵のどこに目を付け，どんな見方をしているのか」「筆者はどんな言葉を使って『鳥獣戯画』を説明したり評価したりしているのか」「筆者は読者に分かりやすく伝えるためにどんな工夫をしているのか」という読みの視点を与えた。

2

書く段階では，その際，絵から読み取ったこと（事実）と絵から感じたこと（意見）を付箋で色分けしながら自分で整理させた。その付箋を元にグループで話し合い、事実だけではなく、絵から感じ取ったことについても交流した。教科横断的指導で深めることができた見方・考え方を手がかりにし、絵画作品を解説する文章が書けるように指導した。

4. 考察

◆データ収集

27件を対象として、テキストマイニング分析のために児童の文章をテキスト化してデータ収集を行ったところ、合計13,155文字に上った。収集したデータは、文を単位とし、『鳥獣戯画』の一場面を記述した鑑賞文である。

【『鳥獣戯画』の一場面を記述した鑑賞文】

◆テキストマイニングを用いた分析の結果

本研究では文書形式のデータを定量的に分析する方法であるテキストマイニングの手法を用いて、鑑賞文の分析を行った。フリーソフト「KH Coder」を使用して、データ全体の抽出語の頻度分析と「共起ネットワーク」作成し、共通の抽出語を含む文書をクラスターに分け、テーマ抽出を実施し、仮説を構築した。

◆抽出語の頻度分布（上位30語）について

「KH Coder」を用いた分析によると、対象範囲の全データにおける文の数は552件、総抽出語数は8,639件であった。図1は、「KH Coder」の抽出語リスト表示・集計機能を利用し、頻出語上位30語の内訳を示したものである。図1で1位、2位を占めたのは「見る」と「戯画」「鳥獣」であり、鑑賞文を書き始めるに当たっての出発点であったことが窺える。その他の30位までの語句を見ると、高畑勲の鑑賞文に用いられている言語が多く、強く影響されていることがわかる。国語科『鳥獣戯画を読む』の教材を読み取り、それを模範にして忠実に書く段階に移したと言える。

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	見る	156	11	絵巻物	31	18	濃淡	25
2	戯画	106	11	見える	31	18	遊ぶ	25
2	鳥獣	106	11	描く	31	23	もう少し	23
4	サル	84	14	線	29	24	はじめ	22
5	絵	73	15	国宝	28	25	一色	21
6	兎	64	16	伝わる	27	26	書く	17
7	ウサギ	61	17	評価	26	26	川	17
8	水	57	18	たった今	25	26	飛びこむ	17
9	場面	53	18	考える	25	29	墨	16
10	猿	34	18	素晴らしい	25	30	筆	15

【 図1　鑑賞文における頻出語上位30語 】

一方で、図画工作科鑑賞領域で培った「形」「色」「配置・構成」「主題」の観点から鑑賞文を分析すると、「形」の観点からは、「サル」84回、「兎」64回、「ウサギ」61回、「猿」34回、「線」29回、「川」17回、「岩」14回等の言語が出現した。

・初めに、色や形を見てみよう。色は墨一色で抑揚のある線と濃淡だけでかいている。形はウサギとサルだけがおり一びきだけ、鹿みたいなのがウサギとサルと遊んでいる。ウサギやサルなど動物でみんなと遊んでいる。
・線もただ、太い線だけ細い線だけじゃなく、太い線も、細い線もある。

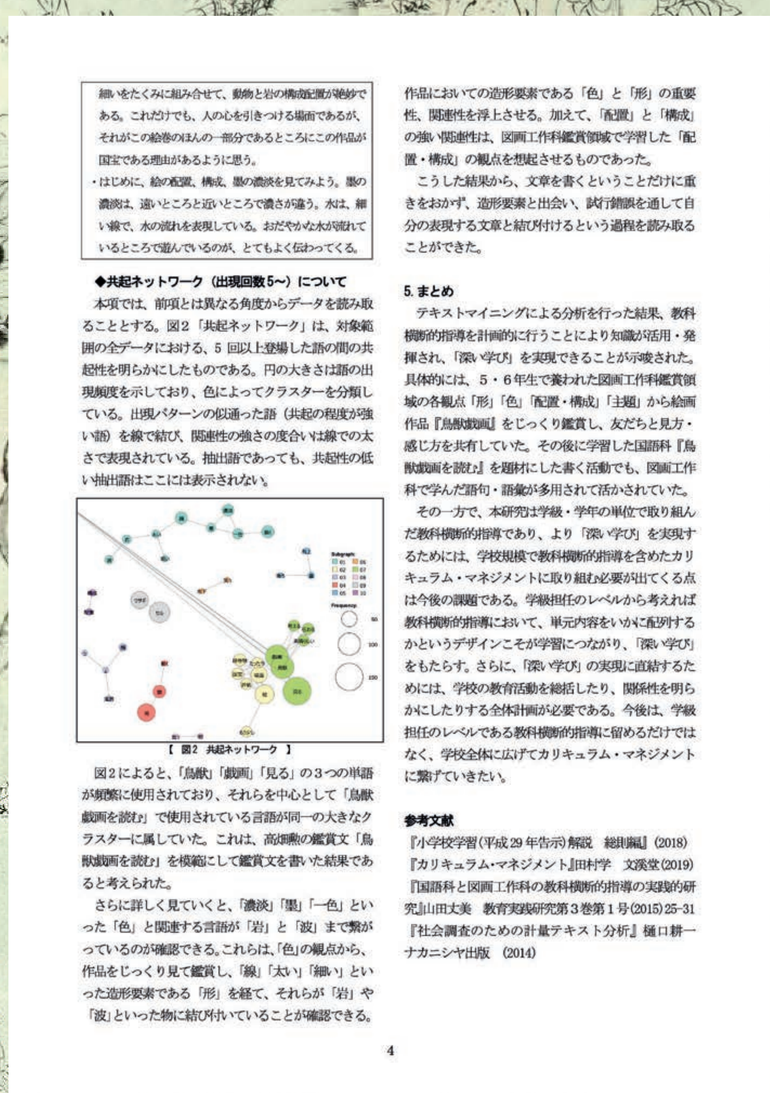
「色」の観点では、「濃淡」25回、「一色」21回「墨」16回「色」11回「濃い」5回「黒い」4回「薄い」3回であった。白の下地に黒色の墨一色で描かれている作品から、濃淡に対する気付きが多かった。図画工作科の「対話による鑑賞」でも、交流した観点である。

・墨一色、黒色だけを使って、描かれている。本当は、濃淡だけで、絵を描いている。
・墨一色だけなのに、色々な色を使っているみたいに薄いも濃い色もある。
・墨一色、線のみで描かれ大きさのちがうはずのウサギとサルが学校のプールの自由時間のように遊んでいるみたいだ。ウサギとサルの色少しこいが波の色はウサギとサルに変わってうすい。

「構成・配置」の観点では、「構成・配置」は6回ずつであった。「右上」9回、「真ん中」7回、「構成・配置」6回ずつ、「左下」5回、「中央」「中心」が3回ずつであった。

・まず、それらの動物は岩の上にいる。墨の濃淡や線の太い

3



細いをたくみに組み合せて、動物と岩の構成配置が絶妙である。これだけでも、人の心を引きつける場面であるが、それがこの絵巻のほんの一部分であるところにこの作品が国宝である理由があるように思う。
・はじめに、絵の配置、構成、墨の濃淡を見てみよう。墨の濃淡は、遠いところと近いところで濃さが違う。水は、細い線で、水の流れを表現している。おだやかな水が流れているところで遊んでいるのが、とてもよく伝わってくる。

◆共起ネットワーク（出現回数5～）について

本項では、前項とは異なる角度からデータを読み取ることとする。図2「共起ネットワーク」は、対象範囲の全データにおける、5回以上登場した語の間の共起性を明らかにしたものである。円の大きさは語の出現頻度を示しており、色によってクラスターを分類している。出現パターンの似通った語（共起の程度が強い語）を線で結び、関連性の強さの度合いは線での太さで表現されている。抽出語であっても、共起性の低い抽出語はここには表示されない。

【 図2　共起ネットワーク 】

図2によると、「鳥獣」「戯画」「見る」の3つの単語が頻繁に使用されており、それらを中心として「鳥獣戯画を読む」で使用されている言語が同一の大きなクラスターに属していた。これは、高畑勲の鑑賞文「鳥獣戯画を読む」を模範にして鑑賞文を書いた結果であると考えられた。

さらに詳しく見ていくと、「濃淡」「墨」「一色」といった「色」と関連する言語が「岩」と「波」まで繋がっているのが確認できる。これらは、「色」の観点から、作品をじっくり見て鑑賞し、「線」「太い」「細い」といった造形要素である「形」を経て、それらが「岩」や「波」といった物に結び付いていることが確認できる。

作品においての造形要素である「色」と「形」の重要性、関連性を浮上させる。加えて、「配置」と「構成」の強い関連性は、図画工作科鑑賞領域で学習した「配置・構成」の観点を想起させるものであった。

こうした結果から、文章を書くということだけに重きをおかず、造形要素と出会い、試行錯誤を通して自分の表現する文章と結び付けるという過程を読み取ることができた。

5. まとめ

テキストマイニングによる分析を行った結果、教科横断的指導を計画的に行うことにより知識が活用・発揮され、「深い学び」を実現できることが示唆された。具体的には、5・6年生で養われた図画工作科鑑賞領域の各観点「形」「色」「配置・構成」「主題」から絵画作品『鳥獣戯画』をじっくり鑑賞し、友だちと見方・感じ方を共有していた。その後に学習した国語科『鳥獣戯画を読む』を題材にした書く活動でも、図画工作科で学んだ語句・語彙が多用されて活かされていた。

その一方で、本研究は学級・学年の単位で取り組んだ教科横断的指導であり、より「深い学び」を実現するためには、学校規模で教科横断的指導を含めたカリキュラム・マネジメントに取り組む必要が出てくる点は今後の課題である。学級担任のレベルから考えれば教科横断的指導において、単元内容をいかに配列するかというデザインこそが学習につながり、「深い学び」をもたらす。さらに、「深い学び」の実現に直結するためには、学校の教育活動を総括したり、関係性を明らかにしたりする全体計画が必要である。今後は、学級担任のレベルである教科横断的指導に留めるだけではなく、学校全体に広げてカリキュラム・マネジメントに繋げていきたい。

参考文献

『小学校学習（平成29年告示）解説　総則編』（2018）
『カリキュラム・マネジメント』田村学　文溪堂（2019）
『国語科と図画工作科の教科横断的指導の実践的研究』山田丈美　教育実践研究第3巻第1号（2015）25-31
『社会調査のための計量テキスト分析』樋口耕一　ナカニシヤ出版　（2014）

4

目標

対象作品が同じ《鳥獣戯画》である題材の図画工作科と国語科の教育的アプローチを比較することで、図画工作科美術鑑賞の独自性を浮かび上がらせる。

方法論

図画工作科の授業における美術鑑賞《鳥獣戯画》と国語科「『鳥獣戯画』を読む」（6年生，光村図書）の教科書や指導書、全国の指導案、実践例を収集・分析し、教育的アプローチを比較する。

質的および量的研究手法を組み合わせた混合方法を用いる。